

玉川学園は2006年から幼小中高一貫教育『K-12 一貫教育』を実施しています。「K-12」は「幼稚園 (Kindergarten) から始まり高等学校を卒業するまでの期間」の呼称で、幼稚園、小・中・高等学校という学校種の枠を越えた教育の連結性・一貫性を考えるコンセプトとして使用しています。小学部から高等部までの各学年を1～12年とし、さらに3つのディビジョン『Primary Division』『Secondary Division』『IB Division』を設けています。

Primary Division (幼稚園および1～5年) = 幼稚園および小学校1～5年

Secondary Division (6～12年) = 一般クラスの小学校6年～高校3年

IB Division (6～12年) = IBクラスの小学校6年～高校3年

玉川学園[幼小中高]

2025年度学校関係者評価結果

K-12 父母会役員からの意見聴取 (まとめ)

2025年度の学校関係者評価会議では、本学への要望・期待について、保護者の視点からご意見をいただきました。主なものは次のとおりです。

◆K-12 教育活動について

<Division 共通>

- 全人教育の理念の元、最善を考え、活動につなげていると思う。「全人教育」「12の教育信条」を三位一体となり表現していけたらと思う。
- 報告書を通して、K-12全体を通して、全人教育に基づいた活動内容、改善点、目標とプロセスの詳細が把握でき、とてもわかりやすかった。
- 限られた時間の中で先生方が年度毎に課題設定をし、達成状況を検証、評価するサイクルを積み重ねている事が資料からも理解できた。
- 各ディビジョン共に、子どもたちの自主性を重んじて、子どもたちの成長に応じた活動内容になっていることが分かった。今後は、保護者全体に、学校の取り組みや情報をもっと発信して行き、学校活動への理解、協力をして頂けるような環境になっていけば、より良い学びの場となっていくのではと思う。
- 全人教育に基づき各ディビジョンが研修など行い、改善に向けていることを高く評価する。
- 報告書を通して、とても詳しく学校内のことが知ることができ、毎年多くのことを考えてくださっていることに改めて感動した。また、学内における留学生の受け入れについては、「受け入れ先の募集」を知らない保護者もおり、掲示板を見るという習慣がない方もいるので、告知など募集方法をもう少し変えてみると、受け入れ家庭が増えるのではと感じる。
- 報告書を通じて、先生方が日々、子どもたち一人ひとりの未来を真剣に考え、試行錯誤してくださっている温度感が伝わってきた。「伝統を守る」だけでなく「常に進化し続ける」玉川学園の姿に、改めて期待を膨らませている。
- 昨年も同様に、全体を通して施策に対する達成状況や課題が抽象的で、具体性を欠いており、響くものがないと感じる。(例：～に重点を置く、～の充実を図る、～検討する、～をサポートした、～の取り組みを成功させた、といった記載等)。具体性に欠けているがゆえに、自己評価結果や課題改善に向けたアプローチが妥当かどうか評価できかねるものが多くあるのではないかと感じる。(例：プロセスをブラッシュアップできた→どういうプロセスをどのようにブラッシュアップしたのか記載がない)
- 自己評価報告を拝見し、玉川学園が長年培ってきた教育理念が、現在の教育活動の中に着実に組み込まれていることを改めて感じた。玉川学園が掲げる全人教育の考え方は、学力の向上にとどまらず、「体験・周囲との関係性・内面的成長を含めた多面的な学び」として各ディビジョン先生方の報告内容に具現化されており、その一貫性に価値を感じている。
- 地震など突発的な災害発生時に学園全体としての備え(備蓄や装備)があることは認識しているが、各ディビジョンにおける行動マニュアルなど、保護者へより具体的な情報開示の機会があると良いと思う。授業中の災害発生時の対応や、帰宅困難な状態の場合の各児童・生徒の引取り(父母のお迎え)や児童・生徒の学園内での宿泊方法など、より具体的な内容が認識できると、各家庭における災害対策にも織り込めると思う。
- 東急田園都市線の青葉台駅から奈良北団地行の路線バスに乗車した際、これから学校説明会へ向かうと思われる親子が路線バスの状況に驚いた発言をしているのを耳にしており、是非スクールバスは実現してほしいと思う。

<Primary Division>

- 幼稚部では、親子の体験学習の場をさらに増やして欲しい。
- 玉川学園内だけでなく、地域の方との触れ合いや、職業体験、ボランティア活動など、外との繋がりをさらに増やしても良いのではないかと思う。低学年から社会を見据えた活動をしていくことで、さらに視野が広がり、可能性が増えるのではないか。
- 一貫校として沢山の学年が触れ合うことを要望する。
- 個人面談の回数をもう少し増やしてほしいとの声をよく耳にする。先生方はお忙しいとは思いますが、子どもによっては、学校での様子を話してくれない子もいるので、もう1回でも回数を増やしていただけたらと感じる。
- 節目で子どもたちの成長の記録のようなものを写真と共にアルバムのような形にして残せたら嬉しい。
- 幼稚部に **Primary(1-5年)**の小学生が本の読み聞かせに行ったり、運動会において **Secondary・IB** の高校生が玉川太鼓を披露したりしていること、**Primary(1-5年)**では、大学の協力のもと、サマープログラムを行ったり、体育祭では大学生と小学生と一緒に玉入れしたりと、ディビジョンを超えて、活動を共にしていることが印象的だった。幼稚部から大学まである一貫校ならではの取り組みで、素晴らしいと思う。

<Secondary Division>

- 「教科学習、探究活動、行事、日常の学校生活」が相互に関連し合いながら、かつ、「国際交流も活発に組み込まれ」、子どもたちの主体性や自律性を育む仕組みが形成されており、一貫教育の強みを生かし、子供達の成長段階（各学年毎）に応じた教育活動が連続性をもって設計されている点が特に印象的だった。
- 玉川ならではの「特徴ある学校生活」が丁寧に積み重ねられているとも感じた。
- 今後もこの特色ある教育実践をより発展させていくことをさらに期待する。すでに玉川学園には、長期的な学びの蓄積や多様な教育資源が存在していると思うが、「玉川らしさとは何か」を維持しながら、スコアだけに捉われず、それでも本学園の卒業生が「社会から評価される！」「良い意味で目立つ！」「学園関係者以外からも大いに評価、羨望される」ことも、次の時代の学校運営の価値になるのではないかと感じる。
- 特色を守ることと進化させることは、緊張関係を伴うが、その両立に挑み続ける姿勢こそが、学校文化をさらに豊かにしていくものと期待している。保護者として、この学びの営みに向き合いながら、本学園ならではの教育の深化を見守っていきたい。
- ディビジョンでの達成目標や取り組みを具体的に知ることができてイメージしやすかった。一方で、ふとその意識が果たして全教員や講師まで行き届いているのだろうか？とは考えた。

<IB Division>

- **IB Division** では国際的な行事が多くなり、世界を身近に感じられる機会が増えた。**EP** クラスから **IB** クラスへの進学において、今後外部から入学する生徒の割合が低くなることを心配している。幼稚部から長く一緒にいる仲間も大事だが、多様性を学ぶ意味でも違うバックグラウンドを持った生徒たちと学ぶ必要があるのではないかと感じる。
- 心の教育に関わる、現在進行の児童・生徒間のトラブルや成長過程において個人が抱える問題とその対応について可能な範囲で触れてほしい。
- 児童・生徒の転入学や途中転学の傾向や状況の分析についても伺える機会があると父母会活動のヒントになるかと考える。
- 非常に充実した内容の報告で、各教職員が意識的にブラッシュアップに注力をされていることに大変心強く安心感を得られた。また、大学との連携交流については、低学年では親子とも体感度が高いと思うが、中学年以上の児童・生徒保護者に伝わりきれていないと残念に感じる。学びの深度や幅の拡大に期待値が高いワンキャンパスならではの環境を先生方から仕掛け、更に有効活用していただけたら嬉しい。

◆教育課程特例校

【評価ポイント：特例部分の学習活動が適切に行われていると思うか】（回答：17名）

適切である：52.9% 概ね適切である：29.4% やや不適切である：17.7% 不適切である：0%

<JP・EP クラス>

- 小学1.2年生では、英語での注意だけでは伝わっていない部分もあるかと思う。特に生活面、マナーやルールへの指導は日本語を使つてのフォローもお願いしたい。
- JP クラス、EP クラスの学力テストの国語のレベルがあまり変わらないとの事で、英語による学習に偏重する事なく成果を出せている背景には補習の実施や先生が常に教室にいる環境が大きいと感じた。
- 以前よりも保護者への説明が増え、不安が少なくなったことがとても良かった。
- 各クラスで使用言語は異なるものの、学園全体が「全人教育」という大きな理念のもとに繋がっていることは、本学園の最大の価値であると考えている。自己評価報告を通じて、先生方が単に英語力の習得を目的とするのではなく、日本語・英語のいずれにおいても深く思考し、自ら考え行動できる子供を育てようとしてされている強い意志が伝わってきた。
- 「英語で学べる」こと自体が大きな魅力として受け止められやすいため、保護者の間で全人教育の理念やその意義についての理解が十分に共有されているとは限らないように感じる。その結果、子どもにとって英語での学習が過度な負担となっていないか、また課題量が適切であるかといった点について、学校と保護者の間で継続的に共有していくことが望ましいのではないかと感じる。
- JP クラスについては、漢字学習や作文などの学習機会が、以前と比べてやや少なくなっていると感じる。日本語による言語力の基盤を育てる学習について、課題の量や学習の深度が、子どもたちの成長段階に応じて十分に確保されているかという点について、引き続き検討の余地があると思う。
- カリキュラムをこなすのに精一杯で、振り返りの時間がないように感じる。低学年では補習（特に英語の科目）などのサポートが足りず、学力の差がでていっていると思う。個人の学力の把握をし、早くからサポート体制を徹底していくことにより、設定されている各学年のレベルを達成出来る生徒も増えていくのではないかと感じる。
- EP クラスの数学や理科は、英語での理解が難しい科目でもある。そのため、2コマ連続で授業をし、最後の時間を「今日のキーワード」など授業の再確認の時間に使用するなど、工夫が必要ではないかと感じる。また、特に低学年では、授業内容や推奨教材などを家庭へ開示し、保護者のサポート体制も整えていく必要があるのではないかと感じる。
- JP クラスと EP クラスは学習目的やカリキュラムが異なる点が多々あるが、同じ学園の生徒であって対立している場面を目にすることがあるので、この垣根を少しでも低くできるような取り組みを期待するとともに学園としての考えも伺いたい。
- 3年生で英語の力がぐっと伸び、「先生の授業が楽しい」と宿題も積極的に取り組んでおり、自分で英語の日記も書くようになった。先生のサポートが素晴らしいと感じている。
- アフターケアもしっかり行われており、子どもたちも安心して学ぶことが出来ると感じている。
- EP クラスにおいて英語力0レベルから学年が上がる毎に力がついていることを実感している。授業以外でもネイティブの先生方が児童と会話する中で、矯正せず、会話として成り立たせてくださっていることが自信につながっていると思う。個々の差はあると思うが、IB Division へ上がるための準備はできていると感じる。家庭学習の Bug Club、Raz-Kids も習慣化しており、家庭でも無理なく勉強できている。

<IB-MYP>

- 状況や要望を汲み取り、教職員間で PDCA サイクルが機能していることを頼もしく感じる。保護者へのワークショップも情報提供を確実に果たしている。
- IB クラスの学業、活動がとてもハードに見える。選んだ道とはいえ、学業以外で学生らしい生活を送れているか？と思うことがある。
- IB Division と Secondary Division は学習目的やカリキュラムが異なる点が多々あるが、同じ学園の生徒であって対立している場面を目にすることがあるので、この垣根を少しでも低くできるような取り組みを期待するとともに学園としての考えを伺いたい。
- 特に問題なく適切であると思う。

<IB-DP>

- IB クラスに関して、課題を少しずつ改善し、効率化を図っていただき、より時間を工夫できてよいと思う。
- それぞれの特性に応じた取り組みがなされていると感じた。特に申し上げる点はないが、引き続き充実した教育活動が展開されることを願っている。

以 上